

研究部だより

第五十四回 全国集会報告

於・京都聖護院御殿荘

二〇一一年八月七日(日)から九日(火)までの三日間、京都聖護院御殿荘において社会科の初志をつらぬく会第五十四回全国集会在開催された。以下、集会の概要を紹介、報告する。

(名前は敬称略)

〔開会〕

開会の司会は水田辰男(研究部長・大阪)がつとめた。集会上に先立ち、市川博(会長・帝京大学)、上田薫(名誉会長)のあいさつがなされ、小林宏己(運営委員長・早稲田大学)の基調講演「授業はだれのためにあるか」があった。

続いて研究部から、今集会テーマ「子どもがみえているか―子ども理解から授業構想と手だてを探る―」の設定について、簡単な趣旨説明を行った。

そして、学年別分科会の実践提案者紹介と自身の実践に関する説明、アピールがなされた。学年別分科会提案者は次の通りである。

第一学年・生活科 山下洋美(三重・鈴鹿市立椿小)

第三学年・理科 原口淳一(熊本・熊本大学教育学部附属小)

第四学年・社会科 山田美保(神奈川・平塚市立富士見小)

第五学年・社会科 武田昌之(長野・茅野市立玉川小)

第六学年・社会科 今西龍也(大阪・寝屋川市立木屋小)

中学三年・社会科 伊倉 剛(愛知・刈谷市立朝日中)

昨年度の反省で、社会科の提案が少ないことがあげられたが、今回は社会科が多く、また理科の提案を得たことは、特徴的であった。

引き続き、鎌田和宏(総務・財務部長・帝京大学)より事務連絡がされた。開会の全体会は、13時より14時15分まで行われた。

研究部としての反省点は、14時までの一時間の予定であったのが、約十五分延長したと併せて、それにより提案者の先生方からの実践の説明をいたたく時間にしわ寄せがあったことである。実践提案者の紹介、説明は、例年全体会の最後であるが、今後前半部にする等考慮検討の必要を感じた。

【学年別分科会】

どの分科会も熱のこもった真剣な研究協議が行われ、アンケートでも「大変刺激を受けた。」「子どもの内面を理解して働きかけをしていくことの大切さを学んだ。」「子どもをとらえ続けることの難しさと必要性を再確認した。」等、今集会テーマを受けて実践を分析検討され、学びのある分科会であったことが伺えた。

司会の先生のご努力とご配慮により、研究協議が内容をともなつてスムーズに進展していったことはアンケートの中にも出されていた。ただ、検討の柱の設定と進行、それに対する参会者のニーズのすれ違いの問題も若干出されていて、今後両者で前向きな分科会作りへの関わりの努力をすると同時に、研究部でも事前打ち合わせ事項の中でそれも踏まえておく必要性を感じた。

「提案資料の備えるべきものをルール化」「授業者には極力質問しない」等のご意見があったが、既に確認されていることではあり、次年度以降も再度確認の上進めたい。

考えなければならぬ点は、「グループ討議の是非」の問題である。アンケートでは概ね「小グループで意見を出し合えてよかった。」「グループで話すと、とても生産的で楽しかつ

た。」等、小グループ化した時間を持つことに高評価のものが多かった。が一方で、「ベテランの先生の読みは本当に深い話でついていきにくい部分もあるが、そこがこの会ならではの魅力であると感じている。小グループでの話し合いもいいが、全体での討議でもっと深めたい。」「議論が薄くなると、会が大切にしてきた部分が失われるような気がする。」等の大切な問題提起もあった。

若い参加者が増える状況の中、参会者の主体的参加意識を大切にしたいということと、テーマを踏まえて問題追究をより深めることとの両立をどのように図っていくか、常任委でも議論していく必要を感じた。

【テーマ別分科会】

テーマ別分科会、並びに提案者の一覧は、以下の通りである。

会の理論と方法 田代裕一（西南学院大） 植村繁芳（中央大）

社会科学授業づくりの課題 藤井千春（早稲田大）

カルテはどう生きるのか 川合春路（大阪樟蔭女子大）

校内研修と学校づくり 的場正美（名古屋大）

個が育つ支援教育 堀智晴（常磐学園大） 園田貴章（佐賀大）

授業アーカイブス―過去の実践に学ぶ― 松本康（香川大）

若手教員の実践作りと悩み 櫻井真治（東京学芸大）

アンケートによれば、どの分科会もおよそ好評でよい学びの場であったといえるようであった。今集会で特に好評だった意見としては、ワークショップによる校内研修分科会、定評のある授業アーカイブス、そして「ごんぎつね」の授業実践を通して検討した若手教員の実践作りと悩みによく見られた。

それらの分科会だけでなく、「時間が足りなかった。」との声が多く、若手教員の分科会は昨年のように「学年別分科会」としてじっくり話したかった。」という声もあった。

【初志の会Q&A・自由交流会の会】

研究部としては、総会に出席しなければならぬのでつぶさな点は不明であるが、Q&Aが大変好評で熱のこもった時間がもたれたようであった。一日目の20時から若い先生や学生の方を中心に三十人近くが集まり、川嶋稔彦（運営委・滋賀）脇山勝枝（佐賀）を世話人に二時間を超えて熱心に交流、話し合いが行われた。

二日目の20時から、恒例の自由交流会の会をもった。前半に、各地区ごとにサークル等を紹介しあい、自由に席を替わりながら和気藹々と交流をした。

初参加だという学生のアンケートでの感想。

「(前略)それ以上に感銘を受けたのが、よりアットホームな交流の時間でした。Q&Aでは、学生の率直な悩みや想いも自由に語らせていただき、それについて川嶋先生や諸先輩方にも様々な反応を返していただけたことは参考になりました。また、自由交流会や時間外の懇談会などでは、さらに先生方の「身近な」一面を垣間見ることができ、憧れの、ややもすると恐縮してしまう先生方との接点を持つことができたのは、将来への意欲と自信を感じられました。何よりも『仲間』という意識、そこからもらえる追究への意欲を感じることができました。」

他の感想にも「自由交流は畳の部屋で」という声があったが、初志の会は「人のつながり」で成り立っているという一面をあらためて思い直させる声だといえる。

【シンポジウム】

今集会テーマと同テーマ「子どもが見えているか―子ども理解から授業構想と手だてを探る―」でシンポジウムを行った。藤本英実（本会事務局長・横浜高等教育専門学校）をコーディネーターに、大嶋正克（栃木・野木町立野木中）、吉田昌平（滋賀・大津市立晴嵐小）、瀬田ゆかり（神奈川・横浜市立浅間台小）の三先生の登壇を得て行われた。

大嶋からは中学の立場から、吉田からは若い教師の経験と
思いから、瀬田からは前任校の南太田小での実践を踏まえて
それぞれテーマの「子どもを見る」とらえとその実践が主張
された。

今回はレジュメも用意され、具体的な授業づくりと子ども
を見ること、日々子どもをとらえようとする教師の動きなど、
具体的に議論される部分が多く、アンケートにおいても高評
価なものが多かった。

【閉会】

川合春路（副委員長・大阪樟蔭女子大）のあいさつに続き、
次年度第五十五回集会開催予定（二〇一二年八月五日（日）六
日（月）七日（火））の長野から中村榮三（甲信越研究部長・長野）、
第五十五回集會事務局長の久田恵樹（長野・長野市立青木島
小）からアピール、呼びかけがあり閉会した。

【その他】

上田薫の講演「我が裏通りの論」は、毎年のように好評で
あった。「自分の奢りをガツンと叱られたように受け止めた。」
といった聞き方が多く、「参加した甲斐があった。」との声も
あった。

なお、講演の詳細は、上田自身によって録音をもとにした
講演録を、次号掲載の予定である。是非お読みいただきたい。

○参加状況について（申込み方・宿泊等）

参加者総数二二四名

（会員一二七名 誌友二九名 一般三九名 学生院生二九名）
参加数としては何とか成立する数を得られたといえるが、
その中には幾つかの問題点が含まれていて、検討の必要があ
ると思われる。

まずそのひとつは、右記のような最終の参加数を得たが、
七月二十日の時点では一〇〇名余、七月二十七日には一五〇
名余というのが実態であった。もちろん、その間、その後
各地区研究部長、運営委員が勧誘、手続きの声かけ等の努力
をいただいで最終の数字になっている。

問題は、その中に手続きをするつもりで忘れている、ずる
ずると何となく遅くなっている（その中には分科会等の役割
のある人も含む）ものが相当数あることである。集會本部と
ともに会を創り、盛り上げていく意識の共有化を期待したい。

集會案内は、五月号、七月号と二回行っているが、五月号
からの申込みは極端に少ない。運営側としては、もっと申込
みが早まる工夫を検討したい。

二つめには、宿泊状況の問題がある。

資格別 参加 様	会	員
59%	宿	通
41%	誌	友
51%	宿	通
49%	一	般
21%	宿	通
79%	学	生
52%	宿	通
48%		

右の表は、今集会における参加の形を資格別に割合化したものである。一般、学生に通いが多いことはある意味やむを得ないと思われるが、会員誌友の宿泊率が低い点については考えさせられる。

これまで、年に一度の全国集会では同宿を基本として、分科会や諸行事だけでなく、三日間をともに過ごしてつながりを深め、研究的にも刺激しあつてともに高まろうという趣旨で集つてきた。しかし、近年近くに別の宿を取つて通いの形にする参加が目立ってきている。費用の面を考えると、理解できる側面もあるが、一方でそれが一つのニーズなのかとも思わされる。

申込方等今後検討を加えるとして、むしろ会員誌友の方々には、御殿荘が会場費を一切取らないで会の開催に理解と協

力をしていただいていることを知っていただき、できるだけ宿泊して集会開催に協力していただくことを訴えたい。

○ 集会開催のあり方（費用・曜日・地区等）

右と関わりのある部分もあるが、アンケートによると「多少費用が高くなつても土日を中心に」と「平日開催でもかまわないので費用を安く」との問いでは、「費用を安く」が多かった。

また、「毎年各地区をまわつて」と「隔年で京都開催」では、圧倒的に「隔年で京都開催」との現在の開催方法の継続との声が多かった。

今、会の魅力と価値を内外にどう広め深めるかということが問われている。それだけに、集会開催のあり方、運営のあり方については、細心の配慮と工夫の知恵を集めて検討したい。会員誌友の方々も、各地区の研究部、または運営委員に声を寄せていただきたい。

（研究部・水田 辰男）